連続公開シンポジウム　アーバン・イノベーション　11 月 5 日

地域再生と大学の役割

11 月 5 日に連続公開シンポジウム「地域再生と大学の役割～地域、住民とのコラボレーション～」が行われました。地域住民、学生含めて約 40 人に来ていただきました。

まず、第一部では内閣官房参事官岡本信一氏により「実践・地域再生～地域住民・自治体・大学の協同・連携～」と題して基調講演を行って頂きました。まず、地域活性化が、国をピラミッドの頂点としたトップダウン型から、特区・地域再生に代表されるように地域の人が機転となり、市町村が受け止め、県・国が支える構造に変わって来ているという状況を述べました。そこでは、地域の限られた資源や強みを活用する、地域のコミュニティを活性化する、民間事業者の健全なビジネスを通じて十分な雇用を実現することが目指されています。現在、地域にはその地域独自の課題があり、それを様々な形で解決しています。具体例として、NPO 法人グリーンエネルギー青森、にしすがも創造舎、島根県隠岐國海士（あま）町の取り組みが紹介されました。特に、財政破綻の危機の中、合併せず自立の道を選択し、独自の取り組みを展開し、平成 19 年地域づくり総務大臣賞の大賞を受賞した島根県隠岐國海士（あま）町の取り組みは詳しく紹介されました。隠岐島前高校の有志が企画し、第一回観光甲子園でグランプリを受賞した「ヒトツナギ」の実施・映像化プロジェクトの映像が流され、海士町で実際に高校生が頑張っている様子を見ることが出来ました。海士町では様々な取り組みの結果、6 年間で 300 人近くの I ターンを全国から受け入れに成功したり（定着率 80%）、募集定員が倍増したりなどの結果を出しています。また、岡本氏は講演の後半で、大学と連携した地域づくりについて話題にし、大学とは、地域の人材・知識が集積する場所で、知の拠点であると述べました。地域に大学があるということは、地域の目線からは、大学の知識や人材を活用できるというメリットがあり、大学は研究開発・教育を通じて地域に貢献するなどの役割があります。大学の国立大学法人化を契機とし、現在では多くの大学が地域と連携して取り組みを行っていることがふれられ、講演が終わりました。

次に、第二部では横浜国立大学における地域連携の事例として、「モビリティデザインの実践プロジェクト」「横浜地産池消プロジェクト」「横エコキャンパスプロジェクト」の各代表にプロジェクト取り組み内容紹介をして貰いました。横浜国立大学の学生が地域をフィールドとし、多岐に

シンポジウムの開催

内閣官房参事官：岡本氏による基調講演

地域課題実習「モビリティデザインの実践」などの発表

及ぶ分野で活動をしていることが報告されました。

第三部では、岡本氏に鈴木隆行教授（江戸川大学）、岡部友彦（コトラボ合同会社代表）、土井一也（横浜市水道局長）を加えてパネルスカッションを行いました。コーディネーターは、池島祥文 准教授（横浜国立大学　経済学部）、高見澤実 教授（横浜国立大学大学院　都市イノベーション学府 / 地域実践教育研究センター　センター長）が務めました。パネルディスカッションは、岡島氏の講演に対する質問を答える形式ではじめられました。パネルでスカッションでは、それぞれのゲストの活動をベースに「右肩下がりの経済、人口減少社会という時代の中で何を目指したらいいのか」を論点にし、議論が展開されました。パネルディスカッション後半では、本シンポジウムのテーマである「大学と地域連携」について話題にあがりました。鈴木氏は「大学と地域の関係は、驚くほど地域と大学の連携が行われている。」という現状を述べました。岡部氏は、大学と協同するメリットは「学生のマンパワー以上に専門的な方とコラボできるメリットがある」と述べた。岡部氏は大学と協同しながらも、今後、地域問題を見つけたときに客観性を持った新しいモデルとなる解決策を見つけ出す為に、大学と協同して社会実験を行っていきたいと語りました。また、土井氏は横浜市の大学と地域連携の現状について「横浜市はどこの局も先生と学生との協力を求めているなど連携ができてきている。しかし、ボストンなどの海外は日常的に大学と地域が結びついていて、横浜市はまだそのレベルには及んでいない。横浜市は自治会・町内会に市民の 80%が入っている点や横浜はコンパクトにそれぞれの専門的な人がいるなどの地盤は出来ているので、きっかけを上手く作っていくことが今後求められる」述べました。

最後に、岡本氏が「地域の需要を真摯に受け止め、課題の発掘が始め、研究分野に固執せず柔軟性をもって展開していけば、大学は価値をもつことが出来る。地域はその場所にずっとあるが、大学は学生も先生も変わっていくという流動性がある。お互いに課題を発掘し、強みを活かしながら、継続を意識して協同する事が大事である」がまとめられました。そしてシンポジウムは、梅本教授（横浜国立大学大学院　都市イノベーション学府　研究科長）、高見澤教授からの「横浜国立大学はもっと地域に根ざした活動をしていきたい」という言葉でシンポジウムは締めくくられました。

パネルディスカッション：4 名のゲストパネラーを迎えて

パネルディスカッションにおける討論

パネルディスカッションでは高見沢先生と池島先生が司会を担当